愛知工業大学研究報告
第19号Ａ　昭和59年

「スペクテーター」にみられる教育論

18世紀初期『ジェントルマン』概念研究の手がかりとして

山　田　岳　志

A Few Remarks on the Discussions on Education in The Spectator

For a study of the notion of the gentleman in early Eighteenth-Century England

Takeshi YAMADA

The object of this study is an attempt to clear the idea of the gentleman in early eighteenth century in relation to its social structure. It may not be too much say that the formation of the idea of the gentleman in England has tended to take their ideas from Europe and been infected by the way of thinking that had derived ultimately from Castiglione. The idea of the gentleman of England has formed the spiritual nucleus of the modern English culture. Such idea of the gentleman as this, however, includes essential difference in value, function, recognition, and attitude according to each society, history, and culture. From this point of view, the notion of the gentleman in early eighteenth century will be discussed here, mainly concerning the education of the gentleman treated in The Spectator.

序　問題意識と研究の視点

先回は，いわゆる“Shakespeare の時代”と言われる近代初期イギリスの『ジェントルマン』概念の手がかりとして，Shakespeare の諸作品を拠所として，あくまでも彼の意識下における『ジェントルマン』概念を追究した。今回も当時の生きた人々の意識の把握といった歴史的研究方法で18世紀初期，アディソン，スティールによって刊行された《スペクテーター》を拠所として，あくまでも彼等の意識下における『ジェントルマン』概念を，同誌において展開される『ジェントルマン』教育についての描写を試みながらテーマへのアプローチを試みる。又，本論はイギリス資本主義の発展に伴なって変化したと思われる『ジェントルマン』概念の問題を設定するための大雑把な予備的試みである。

さて，ピューリタン革命，名誉革命という二つの革命を経験したイギリスを支配したものは近代市民社会に迎合するような生活の諸規範であったと言われる。そこではロックのいう教育理念こそはかのエリオット，ミルトン等の教育理念にとってかわる時代であったとも言われるのである[1]。かかるこのような時代背景にあって，アディソン，スティールによる《スペクテーター》が，ロックによって準備された思想的風土がすでに形成されていたにせよ，同誌が18世紀初期イギリス社会において受容されるべき性格のものであったことは，アディソンが

My publisher tells me, that there are already Three thousand of them distributed every Day :[2]

と語るように，早くも10号で１日の発行部数が3000部に達したということは，同誌の意図が十分認められていたことを物語るものであろう。又，このようなことは18世紀初期イギリス社会をみるのに，その手がかりを提供してくれる格好の素材であるとも言えよう。しかしながら，《スペクテーター》をもって18世紀初期のイギリス社会が反映され尽しているわけではない。それはあくまでも同誌自身の視角を通しての問題提起であり，解決方法の手段であったと解釈されるべきものであろう。しかし，二つの革命を経てイギリス社会に成長定着してくる中産的生産者階層をも対象としたこの《スペクテーター》が[3]，同時代に対する《スペクテーター》的視角による社会像，人間像の試みであっても，それが Basil, Willy が指摘するようなことであれば[4]，その内容の分析を試みることは，ある面においては18世紀初期イギリスの社会像，人

間像を追究できるものと思われる。さて,《スペクテーター》が取り扱った問題は多岐にわたる。しかしその中にあって教育に関するテーマは比較的多くの紙面が割かれている。本論は,《スペクテーター》で展開される教育論の内容が,18世紀初期イギリスの人間像,強いては『ジェントルマン』教育について言及されていることに注目しながら,《スペクテーター》的視角を通して,あくまでも彼等の意識下における人間像,『ジェントルマン』教育がどのようなものであったのかを若干検討してみた。史料としてはGregouy, Smithによって編集された"The Spectator"(everyman's Lib, 4 vols)を使用した。

I 《スペクテーター》の社会像

ここにおいては《スペクテーター》の読者階層を分析しながら,同誌の世界にみられる社会像を描写してみる。さて,《スペクテーター》の目的はアディソン,スティールが

> …… that I have brought philosophy out of closets and Libraries, schools and Colleges, to dwell in Clubs and Assemblies, at Tea-Tables and in Coffee-House.[5]

> I shall take it for the greatest Glory of my Work, if among reasonable Women this Paper may furnish Tea-table Talk.[6]

> As the great and only End of these my Speculations is to banish Vice and Ignorance out of the Territories of Great Britain.[7]

と言うように政治とは無関係な日常生活における社交的雰囲気のもとで,しかも悪徳と無知を追放することであったと言うのである。つまり彼等は《スペクテーター》的方法で18世紀初期イギリス社会における行動規範の形成を意図したものと思われる。結論めいた表現をするならば,《スペクテーター》こそロックによって養成された思想的風土を基礎として社会像の思想的再構築をはかったものと思われる。さて,非政治的スタイルをとる《スペクテーター》はどのような階層をその読者対象と考えていたのだろうか。以下,《スペクテーター》の記すところによって論じてみたい。

> I would therefore in a very particular Manner recommend these my Speculations to all well regulated families.[8]

> I would recommend this paper to the daily Perusal of those Gentlemen whom I cannot but consider as my good Brothers and allies, ... Under this Class of Men are comprehended all contemplative Tradesmen, titular Physicians, Fellows of the Royal Society, Templers that are not given to be contentious, and Statesmen that are out of Business:[9]

> I have lately called the Blanks of Society, as being altogether unfurnish'd with Ideas, till the Business and Conversation of the Day has supplied them.[10]

このように,《スペクテーター》は上記のような階層こそ同誌の読者対象としてふさわしいものと考えていたと思われるが,それはまさしく上流階層を主体としたものであったように思われる。それではイギリスの近代化を押し進めたと言われる中産的生産者階層は対象として考えられていなかったのだろうか。そこで考えられることは,《スペクテーター》がThe Blank of Societyと言うような,つまり商売や日常生活以外には何ら無関心といった階層――,ここにこそ属するように思われるのであるが,しかしながら中産的生産者階層の生活観と言えば,

> A Penny saved is a Penny got,[11]

というようにピューリタン的であり,かつLabour and Restというように,いわばその人生観は生産的世界であったのに対して,《スペクテーター》の世界は社交界という,いわば消費的世界であり,又一方では,

> "Numbers are so much the Measure of every thing that is valuable"[12]

というような人生観に対して《スペクテーター》のように毎号が古典的教養主義的感覚を強くとるものとは対照的世界を感じるのである。結論めいた表現をとるならば,《スペクテーター》の世界はSir Roger de Goverlyという伝統的『ジェントルマン』の描写に重点がおかれていたように思われるのである[13]。要するに《スペクテーター》が描き出す世界はヴェブレンのいう「有閑階級の論理」そのものが条件の世界であり,ウェーバーがいう「資本主義の精神」をもった中産的生産者階層の世界ではなかったように思われる。つまり《スペクテーター》のいう社会像は,所得とその消費生活行動が社会的地位の基準となった社会であったろうと思われる[14]。

II 《スペクテーター》の教育論

「教育こそ人間に大きなちがいをもたらす」[15],というロックの教育思想は《スペクテーター》の読者階層に,いわゆる支配者階層としての新しい秩序の確立を期待したものと思われる。換言するならば,《スペクテーター》

は18世紀初期イギリス社会において常識化されたロックの教育思想をより迎合的社会秩序の確立を目指す教育思想を上流階層社会に展開したものと思われる。さて，ここでは「時代の代弁者」[16]といわれる《スペクテーター》が具体的にはどのような教育論を展開しているのかをみてみる。まずはその前提として18世紀イギリス社会体制を支持する《スペクテーター》の政治への期待についてふれてみる。

> Good of Mankind and the Perfection of human Nature, which ought to be the great Ends of all civil Institution.[17]

というように18世紀初期社会体制を容認する《スペクテーター》は政治への期待を人間性の完成におくのであるが，しかしながら，

> Besides Poverty and Want, there are other Reasons that debose the Minds of Men, ... This natural Tendency of despotick Power to Ignorance and Barbarty.[18]

というように貧困と無知，それに専制権力を非難するのであり，結論的には，

> Riches and Plenty are the natural Fruits of Liberty.[19]

というのであるが，トレヴェリアンの言葉を借りて言うならば，18世紀イギリス社会はイギリス独特の自由の原理が個人企業の繁栄をも可能ならしめた時代であり，このエネルギーこそは産業革命を準備せしめた要因でこそあったろうと思われる。まして重要なことはこの社会的条件こそは18世紀イギリス社会秩序を維持し続けたのである[20]。さて，人間性への完成にいたる過程を社交，読書，思索であるという《スペクテーター》的世界が考える階層がもはや上流階層であったことは明白であろう。では《スペクテーター》が描く人間観とはどのようなものであったろうか。

> Faith and Devotion naturally rrow in the Mind of every reasonable Man, who sees the Impressios of Divine Power and Wisdom in every Object on which he casts his Eye.[21]

そしてこのような理性的存在としての人間は教育によって形成されていくというのであるが，《スペクテーター》では教育の意義についてこういうのである。

> I consider an Human Soul without Education like Marble in the quarry, ... what Sculipture is to a Block of Marble, Education is to an Human Soul. The philosopher, the Saint, or the Hiro, the Wise, the Good, or the Great Man, very ogten lie hid and concealed in a plebean, which a proper Education might, have disenterred, and have brought to Light.[22]

さて，ここで注目したいのは《スペクテーター》が生まれ，地位，家柄などとは無関係に教育の意義を述べていることではなかろうか。ここにおいては，“born gentleman”に対する“bred gentleman”の概念が重視されているように思われる。それは18世紀初期イギリス社会において自由の原理がもたらした上流階層の余裕をみることができるのであるが，さらには《スペクテーター》の世界がブルジョア的社会構成を志向するようなものであったとも思われるのである。このようなことは同誌が教育の意義について述べた後で，教育は次のような環境でこそより効果，期待が得られるということからも十分推察されよう。そして《スペクテーター》は教育環境について次のようにいうのである。

> The middle Conditions seems to be the most advantageouly situated for the gaining of Wisdom, Poverty turns our Thoughtst too much upon the supplying of our Wants., and Riches upon enjoying our Supperfluities: ..... In short, the middle Condition is most eligible to the Man who would improve himself in Virtue:[23]

このように，《スペクテーター》は富者でも貧者でもない，いわゆる中位の環境を維持している階層にこそ教育の向上が期待できるというのである。このようなことは同誌が社会的上昇を続ける18世紀初期イギリスの上流階層に対しての諸規範を示す役割を持つ性格のものであったことを考え合わせれば，教育の対象としての上流階層の要求との合致がみられるのも当然であったろうと思われる。さて，《スペクテーター》で展開される教育論が，時代的にも擡頭してくる上流階層を主たる対象としており，このような理由から同誌が究極的に目指した人間像が支配者としての教育論を展開したのは当然のように思われる。事実，《スペクテーター》が具体的に列挙する教育上の課題は支配者としての，いわゆる伝統的『ジェントルマン』の教育としてルネサンス以降くり返し展開されてきた教育論と酷似したもののように思われるのである。それでは以下，《スペクテーター》の世界で展開される教育論について，やゝ長い引用にはなるが，いとわず列挙してみるとこうである。

> A private Education promises in the first place Virtue and good Breeding, a publick school manly Assurence, and an early Knowledge in the Way of the World.[24]

a private Education seems the most natural

Method for the forming of a virtuous Man: a publick Education for making a Man of Business [25]

Certainly the true End of visiting Foreign Part, is to look into their Customs and Policies, and observe in what Particulars they excel or come short of our own.[26]

At present therfore an unconstrained Carriage, and a certain Openness of Behaviour, are the height of Good Breeding. The Fashionable World is grown free and easie: Our Manner sit more loose upon us: Nothing is so modish as an agreeable Negligence. In a word, Good breeding shows it self most, Where to an ordinary Eye it appears the least.[27]

このように《スペクテーター》の世界で展開される教育論がつまり，公教育と私教育との比較，外国旅行の必要性について，さらには徳性[28]，教養等，又古典的教育と実務教育[29]といったものは，時代的反映はあるものの大部分の目的が支配者階層を対象としたものであったことは疑いのないところと思われる。さらに《スペクテーター》はこういうのである。

Poverty is apt to betray a Man into Envy, ... Povery is too often atended with Fraud, vicious Compliance, Repining, Murmur and Discontent.[30]

このように，《スペクテーター》の教育論は上流階層を対象として成り立つものであり，それはまさしく『ジェントルマン』を『ジェントルマン』ならしめるための教育論であり，広く有閑階層の生活態度と『ジェントルマン』的教養の教育論であろうと思われる。そこにはまだD. デフォー的『ジェントルマン』の概念は願望の範囲内でしかなかったと思われる[31]。

III 《スペクテーター》の『ジェントルマン』像

さて，《スペクテーター》にみられる教育論が時代的条件反映をみせながらも，それが支配者階層としての“bred gentleman”的教育論の展開であったことをみた。ここでは《スペクテーター》の世界が期待する『ジェントルマン』像についての描写を試みる。

No, Man ought to have the Esteam of the rest of the World, for any Actions which are disagreeable to those Maxims which prevail, as the Standards of Behaviour, in the County wherein he lives.[32]

A Man whose Fortune is plentiful, shews an Ease in his Countenance, and Confidence in his Behaviour, he that is under Wants and Difficulties cannot assume.[33]

he that gourns his Thouylits with the everlasting Rules and of Reason and Sence, most have something so inexpressibly Graceful in his Words and Actions, that very Circumstance must become him.[34]

さて，《スペクテーター》において展開される『ジェントルマン』像は，ロックがいう社会的秩序確立のための『ジェントルマン』像とは多少性格が違っているように思われる。そこには，いわゆる《スペクテーター》がえがき出す政治体制に生活する，つまり18世紀初期イギリス社会に融合しつつ支配者階層としての教養を身につけた『ジェントルマン』像であったように思われる。《スペクテーター》の世界でいう『ジェントルマン』とは，『ジェントルマン』的意識を持った階層に認められるような生活，行動様式の所持者ではなかったろうか。又，このような《スペクテーター》的『ジェントルマン』像は，やがて産業革命を経て成長定着してくる中産的生産者階層の『ジェントルマン』志向のモデルともなるようなものではなかったろうか。《スペクテーター》のいう『ジェントルマン』とは，要するに

to be a Fine gentleman, is to be a Generous and a Brave Man.[35]

と言うような性格のものであり，又

Several obliging Deferences, Condescensions, and Submissions, with many outward forms and ceremonies that accompany them, were first of all brought up among the politer Part of Mankind, who lived in Courts and cities, and distinguished themselves from the Rustick part of the Species (who on all occasions acted bluntly and naturally) by such a mutual Complaisance and intercourse of Civilities.[36]

と言うように《スペクテーター》の世界における『ジェントルマン』とは“Polite a man”であったと思われる。そしてこのような『ジェントルマン』のイメージは同誌で展開される教育論の中にも多数散在するように思われるのである。

暫定的結論

18世紀初期の『ジェントルマン』概念を，アディソン，スティールの《スペクテーター》にみられる教育論を手がかりとしてその大雑把な追究を試みてきた。さて，経済史，政治史諸研究が教示してくれる17，18世紀のイギリスが近代史形成の時期であったことは，また近代イギリスの『ジェントルマン』概念を究明していく上でも重要な時代であったろうと思われる。このような時代的条件下にあって《スペクテーター》の描く社会像は所得とその消費生活行動こそ社会的地位のシンボルであったり，一方ではロックの思想的風土の上に成り立つ社会であったろうと思われる。そして《スペクテーター》にみられる教育論もそのような社会を維持するための展開がみられたように思われる。しかしながら，一方ではSir Amdrew Freeportのような人物の登場は，《スペクテーター》の置かれた社会的状況を感じとることができるのである。それにしても《スペクテーター》の描く『ジェントルマン』像は秩序ある自由と富の上に成り立った社会的人間像としての『ジェントルマン』ではあっても，まだD. デフォーやS. スマイルズが主張したような『ジェントルマン』像ではなかったように思われる。

引用・参考文献

1）越智武臣，『ブルジョワ革命の比較的研究』，p.498，筑摩書房，昭和51年.

2）Gregory Smith, "The Spectator" (Everyman's Lib Ed) vol.I, p.31, New York, 1970,（以下The Spectatorと略す）.

3）"The Spectator" 34号（vol. 1，p.102）には下記のような用例がある。
My Readers too have the Satisfaction to find, that there is no Rank or Degree among them who have not their Reoresentative in this Club, ……

4）樋口欣三・佐藤全弘訳，『イギリス精神の源流』，p.268，創元社.

5）The Spectator, vol.1, p.32.

6）ibid, vol.1, p.16.

7）ibid, vol.1, p.176.

8）ibid, vol.1, p.32.

9）ibid, vol.1, p.32.

10）ibid, vol.1, p.32.

11）ibid, vol.1, p.8.

12）ibid, vol.2, p.18.

13）このような見解をとるものに，〈山口孝道，『スペクテーターの世界』，史林，48巻2号，p.65，1965〉がある。本研究にとっても大いに示唆的であったことを特記しておきたい。

14）川北稔，『工業化の歴史的前提』，p.275，岩波書店，1983.

15）世界教育学選集（ジョン・ロック：教育論），p.13，明治図書.

16）深瀬基寛訳，『17世紀の思想的風土』，p.327，創元社.

17）The Spectator, vol.2, p.359.

18）ibid, vol.2, p.359.

19）ibid, vol.2, p.358.

20）林健太郎訳，『英国社会史』，中巻，p.143，山川出版，昭和25年.

21）《スペクテーター》においては人間を理性的存在とする立場をとるが，このような用例は多数散在する。The Spectator, vol.3, p.438.

22）ibid, vol.2, p.139.

23）ibid, vol.3, p.433～434.

24）ibid, vol.2, p.442.

25）ibid, vol.2, p.443.

26）ibid, vol.3, p.144.

27）ibid, vol.1, p.362.

28）ibid, vol.2, p.442.

29）ibid, vol.3, p.105.

30）ibid, vol.3, p.434.

31）前掲書，『工業化の歴史的前提』，p.289.

32）The Spectator, vol.1, p.234.

33）ibid, vol.1, p.235.

34）ibid, vol.1, p.235.

35）ibid, vol.1, p.235.

36）ibid, vol.1, p.361.

その他

- George C. Brauer, "The Education of a Gentleman", 1959, College & Univ Press. New York.
- J. E. Mason, "Gentlefolk in the making" Octagon Book, 1971.

（受理　昭和59年1月17日）